



ジョヴァンニ・アントニーニ (2024.12.13) © 大窪道治

アンナ・プロハスカ (ソプラノ) with ジョヴァンニ・アントニーニ (指揮・リコーダー) イル・ジャルディーノ・アルモニコ

「蛇と炎」に刻まれた、女王たちの愛と宿命 鈴木淳史

レオンコロ弦楽四重奏団

若いカルテット 希望の星 渡辺和彦

[Schedule 2026.3～7]

[Information]

[Review] ジャン＝クロード・ペヌティエ 美しきラスト・ステージ!

ランチタイムコンサート 特別企画 Vol.139 橘高昌男、津野絢音 (ピアノ)

コンスタンチン・リフシッツ ピアノ リサイタル

TOPPAN HALL

P R E S S

Serpent & Fire

— 蛇と炎 —

ふたりの女王をめぐる情熱の音楽

Anna Prohaska
Giovanni Antonini
Il Giardino Armonico



「蛇と炎」に刻まれた、女王たちの愛と宿命

鈴木淳史

アンナ・プロハスカは、今の時代をもっとも象徴しているといっている歌手だ。

10代から有名歌劇場でキャリアを積みつつも、古楽と現代曲、両方のスペシャリストとして君臨。TOPPANホールでもお馴染みの鬼才ヴァイオリニスト、コパチンスカヤとガチンコで渡り合える歌い手であり、共演も多い。

そうした彼女のアクチュアルさは、ユニークなコンセプトをもつアルバムにも現れている。コパチンスカヤとの共演による「聖女マリア／母マリア／娼婦マリア」は新約聖書に登場する2人のマリアを扱うことで、西欧文化のなかで扱われてきた女性のイメージを浮き彫りにした。「PARADISE LOST～失楽園」は、古今東西の「楽園と追放」を主題とした歌曲集だ。死や生、疫病といったパンデミックをテーマにした「死の中にありて生を讃えよ」では、ラ・フォリア・パロク

クオーケストラとの共演で、グレゴリオ聖歌からポップスまで歌っている。

なんといっても、その透き通った高音に、ふくらみのある中域を滑らかに移行させる歌唱がすばらしい。バロックでのシャープな感情表現。モーツァルトやヴェルディ作品では、華麗なコロラトゥーラに加え、リリックな役も得意としている。現代曲などで聴かせる深い表現力も魅力だ。

そんな歌手がようやくTOPPANホールに初めて登場する。共演するのは、ジョヴァンニ・アントニーニが指揮するイル・ジャルディーノ・アルモニコ。2024年12月でのTOPPANホール公演では、生命力が躍動するハイドンの交響曲を聴かせてくれた名コンビだ。

プロハスカとイル・ジャルディーノ・アルモニコは、2016年に「蛇と炎」というアルバムをリリース。今回の公演プログラムは、この「蛇と炎」

をベースに構成されている。

「蛇と炎」とは何を意味するのか。「蛇」は、毒蛇に噛ませることで自害したクレオパトラのこと。権力と愛の渦巻く世界に身を投じたエジプトの女王だ。一方、「炎」は火のなかに身を投げたデイド。カルタゴの建国神話に基づく伝説の女王で、悲恋の果てに命を絶つ。

この2人の女性をテーマにすることで、古代のアフリカとヨーロッパの関係性、そこに投影される男女の悲恋を立体的に描こうというのだ。クレオパトラといえばヘンデルの《エジプトのジュリア・チェーザレ》、デイドならパーセルの《デイドとエネアス》が思い浮かぶが、もちろんそれだけではない。さまざまな作曲家が彼女たちを主人公とするオペラを書いている（バロック・オペラという性格ゆえ、悲恋ではなくハッピーエンドで終わるのが定石だが）。

「蛇と炎」では、それらのオペラのレチタティーヴォやアリアを組み合わせ、シームレスに演奏、ひとつのオペラのように作り上げる。いわゆるパスティッチョ・オペラ的手法だ。そこでは、クレオパトラとデイドの2人の人物が重なり合い、またはコントラストを築く。あるいは、それぞれの作曲家の作風の違いが、グラデーションのような移ろいのなかから浮き上がってくる。

たとえば、同じクレオパトラを題材にしても、それぞれの作曲家の違いが興味深い。バロックのなかでも初期にあたるカストロヴィッラーリが書いたアリアの深い陰影感。中期のサルトリオは軽快にしてリズムカル、1600年代中盤のヴェネツィアで熱狂的に受け入れられたスタイルだ。後期に属し、ナポリ派でもあるハッセの音楽は、劇的で歌唱も装飾的で優雅になる。そしてヘンデルは心に残る美しい旋律を用いて、より複雑な心情を描く。プロハスカは、それぞれの特色を鮮やかに歌い分けつつ、1人の人間が持つ多面性をも表現してくれるのではないかと。

その間には、ロックの《テンペスト組曲》やパーセルの《妖精の女王》よりシャコンヌなど、器楽のみの曲が序曲や間奏曲として演奏される。サンマルティーニのリコーダー協奏曲では、アントニーニによるソロも楽しみだ。こうした器楽作品を含め、見事な構成力で仕立てあげられた一篇のドラマ。その深淵にどっぷりと身を委ねたい。

(すずき・あつふみ／音楽評論家)



TOPPANホール初登場の2024.12.13公演より





LEONKORO QUARTET



若いカルテット 希望の星

渡辺和彦

レオンコロ弦楽四重奏団の2024年4月27日の東京デビューは鮮烈だった。曲はウェーベルンの《緩徐楽章》、シューベルトの第9番ト短調D173、ベートーヴェンの第7番ハ長調。過度に感情移入することを避けて楽譜の指定通りほぼ9分で淡々と演奏したウェーベルン（ハンシェル弦楽四重奏団が2017年11月、15分かけて情緒纏綿と演奏していったことがあった）、18歳時の作曲者が確信犯的なルール違反を散りばめたためハラハラどきどき、それを「ボン」と出してきたので実にスリリングだったシューベルト、青年ベートーヴェンの意欲と野心が爆発した《ラズモフスキー1番》。曲がそのまま「レオンコロ」の意欲と野心に聴こえた。

何よりも音楽が若々しい。近年のカルテットにありがちな「第1ヴァイオリンが地味なのを他の3人との緊密なアンサンブルでカバーする」といったスタイルとは違い、第1ヴァイオリンのヨナタン・昌貴・シュヴァルツが実にいい。カルテットでこのような雄弁で表情豊かな第1ヴァイオリンを持っているというのは、もうそれだけで貴重。ある資料によれば日本人の母とドイツ人の父を両親にもち、チェコのルカス・実・シュヴァルツとは兄弟であるという。ちなみにヴィオラの近衛麻由は両親ともに日本人ながらも阿姆斯特ダム生まれで同地育ち。国際色豊かだ。

2026年5月12日、こんなに早く彼らの東京再登場が実現するのはうれしい。今回は第2ヴァイオリンが前回のアメリー・コジマ・ヴァルナー（この人は両親ともドイツ人だった）から垣内絵実梨に交代。彼女は内外の数多くのコンクールに上位入賞、17歳でベルリン芸術大学に入学した逸材で「私たちの感性や音楽の方向性と抜群に合ったプレイヤー」（近衛）だという。すでに何か月も著名ホールで共演を重ねている。

TOPPANホールでの彼らは、前回“来日”時と同じウェーベルンの《緩徐楽章》でスタートする予定。再現方法は以前のものに近いのか、それともあの曲が持つ異なるストーリー（完全な後期ロマン派作品なのか、のちの新ウィーン楽派の闘志を予感させる曲なのか）の別のほうを選ぶのか。これに続いて「あのヴィトマン」の最新作、弦楽四重奏曲第9番《ベートーヴェン・スタディV》、そしてこのイェルク・ヴィトマン作がベースとしたベートーヴェンのOp.131。連続して演奏される7つの楽章約40分が、ベートーヴェン作ではどのように若々しく（であれば、ほとんど新境地）、または熟成され

た響きで（成功した場合の通常の再現法）408席に鳴り響くのか。

2024年6月に作曲家本人と「共に取り組んだ」というヴィトマンの未知の新作は、彼のことから聴いて即座に「ベートーヴェンの131がベース」とはわからないかもしれない。どこが「ベースになった」のか不明、謎解きは聴き手の自由に判断、ということになるのか、そうではないのか。「レオンコロ」の4人によればそれは「素晴らしくも技術的に難しい」「ベートーヴェン的でありながらもヴィトマンらしい遊び心に満ちたモチーフが散りばめられた」「抒情的で繊細なダイナミクスが聴き手の感覚の限界を試す」作品であるという。

現在カルテットを取り巻く環境は厳しい。欧米、日本、韓国、中国で数多くの若い4人がアンサンブルを作っているとはいえ、その多くが短くして使命を終える。「30代の壁」という人もいるくらいだ。その意味は、創設時のメンバーが30代になると、音楽家として安定的に「食べられる」地位を求めてオーケストラの首席ポジションなどへと移って行き、残ったメンバーもそれに続く。このスパイラルに陥ると、短い期間にメンバー交代が激しくなっていく。「レオンコロ」の師匠格に当たるアルテミス弦楽四重奏団がこのパターンによって自然消滅していった。

しかしそれではカルテットに未来はない。「生涯カルテット一筋で貧乏生活を貫いてほしい」という野暮は言わない。そのような非現実的な願望はともかく、4人が今後も現在の形でカルテットを継続し、やがてそれぞれが別の大きなポジションを獲得したとしても「レオンコロだけは不滅です」としてやはりカルテットの名曲や新作を演奏し続ける、そうした存在でいてほしい。「レオンコロは若いカルテットの希望の星」なのだから。

（わたなべ・かずひこ／音楽評論家）

アンナ・プロハスカ (ソプラノ) with ジョヴァンニ・アントニーニ (指揮・リコーダー) イル・ジャルディーノ・アルモニコ

2026年4月4日(土) 18:00

残席わずか

- バーセル：《ティドとエネアス》より
序曲／《ああ、ペリンダ、私は苦悩に押しつぶされそう》
グラブナー：《カルタゴの女王デイド》より
《流れる水のせせらぎよ》
- サルトリオ：《エジプトのジュリオ・チェザレ》より
《愛したくなどない》
- ロック：《テンペスト組曲》より
ガリアード／リルク／カーテン・チューン
- カストロヴィツァーリ：《クレオパトラ》より
《さらば王国よ、王位よ》
- サルトリオ：《エジプトのジュリオ・チェザレ》より
《私が望めば》
- バーセル：《妖精の女王》より
シャコンヌ 《中国の男女の踊り》
- グラブナー：《カルタゴの女王デイド》より
《空はずしりと雷をたたえている…裏切りの愛の神は》
《嵐にかき乱されて》
- サンマルティーニ：リコーダー協奏曲 へ長調
- ハッセ：《見捨てられたデイドーネ》より
《嵐はもう始まっている》
- ヘンデル：《エジプトのジュリオ・チェザレ》より
《何てことを耳にするのかしら？ おお神よ！…
あなたの憐れみかかげれば》
- カステッロ：4声のソナタ第15番
カヴァッリ：《デイドーネ》より
《誇り高きジェトゥーリの王よ》
- ハッセ：《マルカントニオとクレオパトラ》より
《死の凄まじい形相に》
- ロッシ：ルイーダ氏のパッサカリア
- バーセル：《ティドとエネアス》より
《この山は狩りの女神のお気に入り》
《あなたの手を貸して、ペリンダ…私が地に伏すとき》

12,000円/U-25 6,000円 全席指定

特別協賛：株式会社 竹中工務店

Artist Message

TOPPANホール初登場のレオンコロ弦楽四重奏団から、 公演に寄せる想いが届きました！

昨年4月、TOPPANホールで行われたヴァイオリン・リサイタルを聴く機会に恵まれました。その時、ホールの美しさのみならず、聴衆のみなさまの音楽に対する素晴らしい集中力と、室内楽のために存在するかのようなホールの素晴らしい響きに心から感動しました。今回、TOPPANホールで演奏できることを、とても楽しみにしています。プログラム前半には、私たちの初のCDアルバム「OUT OF VIENNA」(Alpha Classicsより2026年1月30日発売)にも収録したウェーベルンの《弦楽四重奏のための緩徐楽章》に加え、ヴィトマンの《弦楽四重奏曲第9番(ベートーヴェン・スタディV)》を演奏します。この素晴らしくも技術的に非常に難しい作品は、2024年6月に作曲者のイェ

ルク・ヴィトマン本人と共に取り組む貴重な機会に恵まれました。ベートーヴェンの《弦楽四重奏曲第14番 嬰ハ短調Op.131》に基づくこの曲には、ベートーヴェン的でありながらもヴィトマンらしい遊び心に満ちたモチーフが散りばめられており、抒情的で繊細なダイナミクスが、聴き手の感覚の限界を試すようです。プログラム後半には、その「原典」とも言える、ベートーヴェンの傑作Op.131を演奏できることをとても光栄に思っています。TOPPANホールの素晴らしい音響の中で、刺激的なこのプログラムをみなさまと分かち合えることを、心から楽しみにしています。



日時	公演
3/4 (水) 19:00	ベルリン古楽アカデミー I—Pure Bach II—Bach & Beyond
3/5 (木) 19:00	平崎真弓 (ヴァイオリン、コンサートマスター) グセニア・レフラー (オーボエ) / ラファエル・アルパーマン (チェンバロ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
3/6 (金) 19:00	ゴートエ・カプソン (チェロ) & フランク・ブラレイ (ピアノ) ベートーヴェン《チェロ・ソナタ》全曲 特別協賛：清水建設株式会社
3/20 (金・祝) 18:00	北村 陽 (チェロ) 園田奈緒子 (ピアノ) 特別協賛：東急建設株式会社
4/4 (土) 18:00	アンナ・プロハスカ (ソプラノ) with ジョヴァンニ・アントニーニ (指揮・リコーダー) イル・ジャルディーノ・アルモニコ 特別協賛：株式会社 竹中工務店
4/12 (火) 19:00	レオンコロ弦楽四重奏団
5/26 (火) 19:00	ニコラ・アルトシュテット (チェロ) プロジェクト 第1夜—Duo ヨナス・アホネン (ピアノ)
5/29 (金) 18:30	第2夜—マラソンコンサート イリア・グリーンゴルト、毛利文香 (ヴァイオリン) / 原 麻理子 (ヴィオラ) / アンナ・レナ・エルベルト (ソプラノ) / ヨナス・アホネン (ピアノ)

日時	公演
6/10 (水) 19:00	トリオ・ヴァンダラー 特別協賛：株式会社 竹中工務店
7/6 (月) 19:00	(ハーゲン プロジェクト フィナーレ)
7/7 (火) 19:00	ハーゲン・クアルテット
〈ランチャタイムコンサート〉 TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート [全席指定]	
5/2 (土) 12:15	Vol.139 〈1909年製ベーゼンドルファーの息吹 Ⅲ〉 ベーゼンドルファー Model250、スタインウェイ D それぞれの魅力 橋高昌男、津野絢音 (ピアノ)

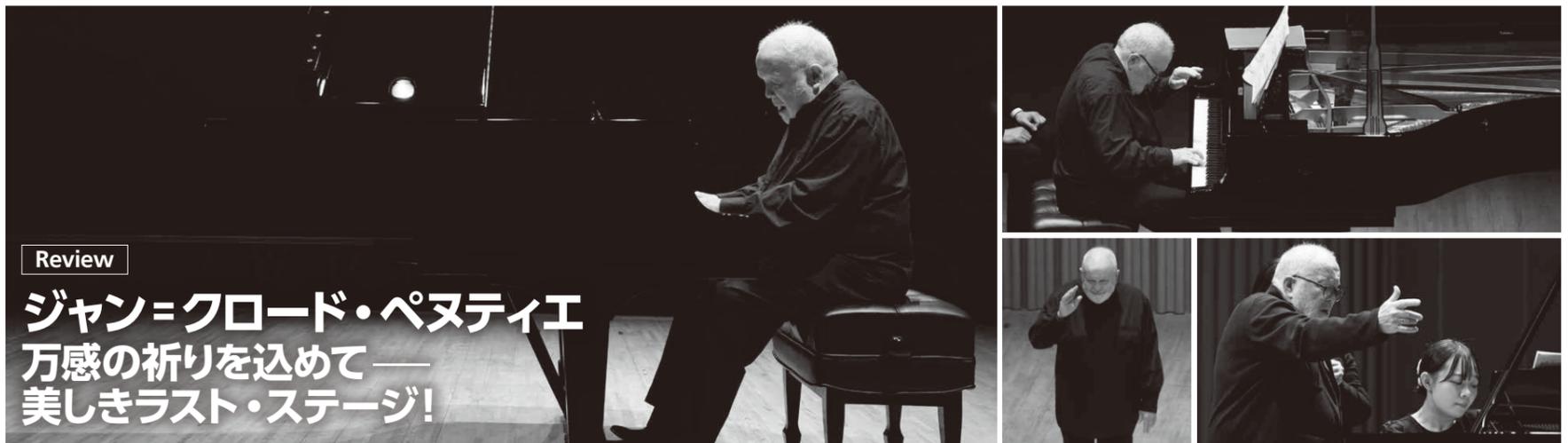
※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。
ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。

2026年2月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION



Review

ジャン＝クロード・ペヌティエ
万感の祈りを込めて—
美しきラスト・ステージ!

『あなたの招きには何度も応じているのに、私がいくら招待してもあなたは全然私のところへ来ないねえ』いたずらっぽくそう話すペヌティエの優しい声がずっと脳裡から離れなかった私は、2025年4月、彼の最後のリサイタルを前に、パリを経由してシャルトルへと向かった。マエストロが自ら運転して迎えてくださり、1時間ほど街を散策した後、奥さまの待つレストランへ移動し、いろんな話で盛り上がった。「なぜ演奏活動から離れて宗教活動に専心するのか」という問いには『あなたのように私の演奏を求めてくれる人よりも、もっと直接的に私の救いを待っている人が大勢いるのでね。リサイタルを弾くにはかなりの準備時間が必要だけど、その時間を作るのが難しくなっちゃった』と語っていた。『演奏家は役者のようにいろいろな人生を描かなくてはならない。それらは他者の人生なのに、いつの間にか自身の生き方が音楽に染み出ているものだ』『あなたのコンサートの作り方は、とても独創的だね。まるで演出家のように思っ

ていたら、芝居の仕事をやっていたという話を聞いてすごく納得がいったんだよ、話したっけ?』と奥さまに向かって嬉しそうに語ったりもした。食事の後は、世界遺産として観光名所の大聖堂と彼が司祭を務める教会に案内をしてくれた。ご自身の教会の質朴な感じがまさにマエストロのぬくもりを感じさせ強い印象を残している…。

ペヌティエとは「演奏する、コンサートを開くという行為が、スター性の追求やお金稼ぎとダイレクトに繋がるのではなく、人が人たる所以を示す場だと考えている」という点で深く結ばれていたと思う。そしてその絆が最後のリサイタルの場としてTOPPANホールを選んでくれた最大の理由だろう。

12月4日。コンサート当日のペヌティエは、いつもとまったく変わりなく時間を過ごし淡々とゲネプロを終えた。飾り気も負いもまったくなくその背中にはいつも多くのことを教えさせられる。コンサートもいつもとまるで変わらない様子で始まった。最後ということだと

もすれば生じる余計な感傷とは一切無縁。いつもながら丁寧な真摯に作品と向き合い、作品の求めるままに時に激しく、時にやさしい。常に人肌のぬくもりをまとい、ピアノという楽器がわがもの顔にふるまう瞬間は一瞬足りとも生じない。どこまでもかぎりなく人間的で、人の営みの尊さが伝わってくる。ベートーヴェン最後のソナタの第2楽章(アリエッタ)が、ここまで生きる力を漲らせて弾かれた例を他に知らない。

翌日のマスタークラスでは、本堂竣哉や鈴木愛美ら若い才能に「ピアノを弾く大切さよりも音楽を奏でる意味と意義」をきっちり伝えていた。そうしたマエストロの音楽への眼差しは、TOPPANホールの多くのお客さまの心の奥深くでこれからも生き続けることだろう。

ジャン＝クロード・ペヌティエ、本当にありがとう!

(西巻正史/プログラミング・ディレクター)

二大銘器“ベーゼンドルファー×スタインウェイ”、響きの競演



2025年6月より貸与されている1909年製ベーゼンドルファー Model250と、ホール所有のスタインウェイD、ピアノの二大銘器を一度に体験できる特別なランチャタイムコンサートを企画しました。ドイツ音楽への深い造詣を持つ実力派・橋高昌男がベーゼンドルファー Model250を、フレッシュな音楽性が際立つ津野絢音がスタインウェイDを演奏。澁淵としたベートーヴェンとロマンチックなシューベルト、その橋渡しとして橋高が提案したリストが加わった魅力的なプログラムで、それぞれの楽器の個性の違いをお届けします。

ホール隣の印刷博物館では、今回津野が演奏するベートーヴェンの《ピアノ・ソナタ第7番》の楽譜の現物(一部)が企画展示されており、ベートーヴェン

に関するトークイベントも開催されます。初夏の爽やかな風とともに、感性と知的好奇心を同時に満たし、音楽を多面的に味わう特別な一日を、どうぞお楽しみください。

〈ランチャタイムコンサート Vol.139〉
1909年製ベーゼンドルファーの息吹 Ⅲ
ベーゼンドルファー Model250、
スタインウェイD それぞれの魅力

2026年5月2日(土) 12:15
橋高昌男、津野絢音 (ピアノ)

【津野絢音:スタインウェイD】
ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ第7番 二長調 Op.10-3

【橋高昌男:ベーゼンドルファー Model250】
リスト:《巡礼の年 第1年スイス》より
〈ワレンシュタットの湖で〉〈泉のほとり〉
シューベルト:4つの即興曲 D935
1,500円 全席指定

【TOPPANホールクラブ】
無料(ゴールド会員2枚/レギュラー会員1枚)
※電話・窓口にてお申し込みください。

コンサートのあとは印刷博物館へGO!

印刷博物館企画展「名著誕生 ヴァチカン教皇庁図書館展Ⅲ+」
トークショー「ベートーヴェンの愛した哲学」
2026年5月2日(土) 14:00

講師:大橋容一郎(上智大学名誉教授)
場所:印刷博物館
定員:70名(事前予約制)

*詳細は、印刷博物館、TOPPANホールのWEBサイトでのご案内します。

究極のバッハ&ハンマークラヴィーア

2022年に2夜にわたって開催した〈BA-DSCH Project〉(ホール主催)の中心アーティストとして登場した、コンスタンチン・リフシッツ。ソロで聴かせたJ.S.バッハ(第1夜)、日本の若手・名手とともに濃密に紡いだショスタコヴィチ(第2夜)は、彼ならではの個性あふれる音楽性と揺るぎない実力によって、聴衆の心奥に鮮烈に刻まれました。そのリフシッツが、約4年ぶりにTOPPANホールのステージに帰ってきます。

偉大なロシアンピアニストの系譜に連なるJ.S.バッハの名人たちと同じく、リフシッツもひととき深くJ.S.バッハに向き合ってきたピアニストのひとり。今回のリサイタルでは、ふたたびJ.S.バッハ、そしてハンマークラヴィーアに挑みます。常に深い作品解釈で、聴く者に様々な発見を与えてくれるリフシッツ。鬼才が描く新たな高みとその圧倒的な音楽を、心ゆくまでお楽しみください。



コンスタンチン・リフシッツ
ピアノ リサイタル

2026年4月17日(金) 19:00

J.S.バッハ:カプリッチョ 変ロ長調 BWV992
《最愛の兄の旅立ちに寄せて》
:平均律クラヴィーア曲集第2巻 第21番
前奏曲とフーガ 変ロ長調 BWV890
J.C.バッハ:眠れるカミッロのための
エーベルリン風アリア
J.S.バッハ:平均律クラヴィーア曲集第1巻
第22番 変ロ短調 BWV867より フーガ/
第21番 変ロ長調 BWV866より 前奏曲
ベートーヴェン:ピアノ・ソナタ 第29番 変ロ長調
Op.106 《ハンマークラヴィーア》

全席指定:6,000円/ U25 3,000円

主催・お問い合わせ:
パシフィック・コンサート・マネジメント 03-3552-3831
※本公演は中止となりました。

表紙:ジョヴァンニ・アントニーニ

瞳の奥に迸る情熱をたぎらせ、音楽の深淵を描き切った至高の古楽のタペより。一糸乱れぬ統率でイル・ジャルディーノ・アルモニコを率い、生命力漲る新たなハイドン像を創出、客席を虜にした巨匠の魂の叫びが響いてくる一枚を。この4月には、名ソプラノ、アンナ・プロハスカを迎え(Serpent & Fire)の炎を灯し、再び情熱たぎる音楽をお届けします。

編集後記

厳しい寒さも少しづつやわらぎ、ほんのり春めいた空気を感じる今日この頃。小さな梅のつぼみがほころび始めると、思わず顔もほころびスマホで写真を撮ってしまいます。ところで、「今年こそ〇〇するぞ…!」と張り切って設定した新年の目標の数々も、気がつけば

早くもいくつか忘れてしまっている自分を深く、深〜く反省しつつ、毎年毎年健気に花を咲かせてくれる梅の花のように、決めたことを確実に実行できる人間に、今年こそ、なりたいたいと願います。みなさまにも、音楽に彩られた心躍る春が訪れますように。(ゆ)